

わくわくレジャーランド

——サンプル——

1. エントランス

レジャー施設とは思えないほど暗い入口。天井の隅に取り付けられた数台の監視カメラが、相田（あいだ）正太郎（しょうたろう）をじつと見下ろしている。

黒いドアを抜けて中に入ると、二十代半ばと思しき男が相田に深々と頭を下げた。

「いらっしやいませ。相田さま。今日は当店をお選びいただき誠にありがとうございます」

白シャツに黒ベスト、黒いスラックス。パチンコ屋のスタッフのようないでたちだ。しかし相田を見た男の顔はきりつとしており、まるで高級ホテルのスタッフを思わせる。

「本日ご案内いたします、望月（もちづき）と申します。どうぞよろしくお願いいたします」

「よろしく頼む」

望月がほほ笑んだ。しかしその目の奥に隙はない。

「こちらのバンドを手首にお付けください」

腕時計のような丸い画面のついたそれを左手首にはめる。触れてみると、残高ゼロ円と表示された。

「ご入店前にチャージをお願いしております。最低五十万円となりますが、お帰りの際に残額はご返金いたしますのでご安心ください」

「足りなくなったら店内でチャージすることもできるのか」

「もちろんでございます。ですが途中で離席することを厭(いと)われるお客様が多くいらつしやいますので、場所をお移りになられる前に多めにチャージされるか、最初から可能な限りのチャージをされることをおすすめしております」

案内された機械にバンドをかざし、クレジットカードを挿入する。

「初回ご来店の方のチャージ上限は五百万円でございます。二回目以降は一千万円まで可能となりますので」

自分がいったいどれほど金を使うのかは想像がつかなかったが、どうせ返金されるのだ。上限いっぱいチャージし、望月に向き直る。

「チャージした」

画面に触れて「十三時・残高五百万円」という表示を男に見せる。

「ありがとうございます。それではご案内いたします」

2・クレーンゲーム——乳首責め——

(おお……)

明るい店内。一列に並んだ巨大な透明の箱。その一つ一つに裸の男の子が様々な体位で固定されていた。

一番入口寄りの子は足を大きく開いてペニスからアナルまでを丸見えにさせているし、その次の子は四つん這いになってアナルを強調させている。立った状態で自分でペニスを持って、先端の小さな穴を見せつけている男の子もいた。

「これはすごいな」

「いわゆるクレインゲームです。例えばこの筐体(きょうたい)ですが」望月が操作ボタンの前に立った。「こちらに書かれているとおり、この男の子は乳首の担当です。こちらのスティックとボタンを操作し、アームで乳首を挟んでやってください」

相田が正面に立つと、裸で寝転んだ男の子と視線がぶつかった。目は潤み、頬には赤みがさしている。長いこと愛撫を待っていたのがよくわかった。

全身を眺めると、透明なプラスチック製の貞操帯に包まれたペニスは限界までパンパンに膨らみ、張り付いてしまっていた。

「プレイするにはここにバンドを近づけてください。こちらのゲームは一プレイ千円です。チャージされた分から引かれていきますので、遊びすぎ

にご注意ください」

相田ははやる気持ちを抑えながら左手を動かした。

* * *

「あつ、あ……」

いやらしい声が漏れてしまう。早く刺激が欲しい。

仕事が始まって三時間。開店と同時に入ってきたお客様の客に、無影灯に当てられた裸体を舐め回すように見つめられ、その視線だけで膨らみかけたペニスは貞操帯に起ち上がることさえ阻まれていた。

(タマタマ痛いっ……)

早く乳首をコリコリしてほしいのに、みんなにやにやししながら覗き込むばかりで、誰もプレイしようとはしてくれない。

この仕事で一番つらいのは視線だけで体を高めさせたまま、満足気な顔で立ち去られてしまうことだ。

わかっている。ここに来る客のほとんどはペニスやアナルをいじる方が好きなのだ。ガラス越しに機械を操作して地味に乳首なんて狙うよりもっと楽しいものがある。ペニスとか、アナルとか……でも自分だって気持ち良くなりたいたい。

中には乳首責めが大好きで一日中プレイしてくれる客もいる。でもそういう人はわざとアームの位置をずらして焦らしたり、片方の乳首だけをいじったりと意地の悪いことをする。

だから嫌……けれど今はもう、それでもよかった。誰かに操作された機械に体をいじられたい。間違えたふりをして貞操帯に包まれたペニスを狙ってくれてもいい。

「あ、ン、はあ……」

客がボタンを操作する。それを想像するだけでペニスはぐんぐん膨らもうとする。でも貞操帯が邪魔をして、膨らみきることができない。

仕事のために、プライベートでもオナニーをすることは禁止されていた。乳首イキができるというのが売りだからだ。

でも先週の仕事の時もその前の時も、いくまでも乳首をいじってくれる客はいなかった。だからもう、一か月も射精できていない。

気持ちよくなりたい。本当はペニスを思い切りしごきたいし、しごいてほしい。何度そちらに担当替えを申し出ようと思ったことか。でも自分がいなくなったら乳首を担当する人がいなくなってしまう。そしたら乳首責めのためだけに通ってきたくれている客に申し訳が立たない……と思うと決断することができなかつた。

でも、今日もイけなかつたらさすがに……そう

思った時、案内人に連れられてきた客が正面に立った。

「あ……」

目が合った。燃えるような熱い視線。この人はきつとプレイしてくれる。

「はあ……ハア……」

期待だけで熱い息が漏れる。

客が赤く勃起した乳首を見た。

「いやらしい子だね」

「はい。乳首をいじられるだけで射精できますので、うまく操作できた際はぜひペニスにもご注目ください」

「それはすごいな」

客がボタンに手を伸ばした。ウーン……という音を立て、クレーンが動き始める。

「あ、あ……」

期待だけで達してしまいそう。上を向き、視線だけでクレーンの動きを追う。

（あ……あ……もう少し……）

3. クレーンゲーム——オナホール——

「あーっ、くそっ！」

メガネをかけた中年小太りの男がドンと苛立た

しげにガラスを叩いた。筐体の中で勃起ペニスを手で固定していた男の子が、体をビクリと震わせる。

望月が男に走り寄った。

「お客様、申し訳ございませんが男の子が怯えるような行為はお慎みくださいませ」

「くそ！ これ！ この子、自分でちんちんずらして逃げようとしてる！」

「そのようなことは——」

望月がチラリと男の子に視線を向けた。否定するようにはふるふると首を振っている。すっかり怯えているようで、その様子を見るだけで胸が痛んだ。

「申し訳ございません、お客様。それでは他の男の子でお遊びくださいませ」

「けど——」

「後ほど監視カメラで確認いたしますので。事実確認が取れ次第、お話をさせていただきます」

「チッ」

どうやら言いがかりだったようだ。どこか気まぐずそうな顔で、それでも精一杯の悪態をついて男はどこかへ去っていった。

「申し訳ございません」

「かまわないよ。大変だね」

「ありがとうございます」

「この男の子は今から休憩になるのかな」

「いえ、このままお遊びいただけます」

「じゃあちよつと遊ばせてもらおうかな」

乳首責めで要領は得ていた。十回一括ボタンを三回押して、三十回分の支払いを済ませる。

こちらはアーム部分に透明なオナホールがついていた。これを男の子の持つ勃起にかぶせることができれば、きつと自動で抜き挿しを始めるのだろう。

相田は男の子にほほ笑みかけてからボタンに手を置いた。

* * *

(怖かった……)

でも、タイミングよく望月が来てくれて助かった。

さっきの客は下手くそだった。鼻息は荒く目は血走っていて、ガラスで遮られていなければ手を出されていただろうなと思うほど興奮していた。

ここは客層がいいので、ああいう客が来ることはほとんどない。でもだからこそ、時折来るとしても怖くなってしまふ。

(ンッ……あつ)

前立腺に固定された小さなローターが震え出した。勃起していなければゲームにならないので、柔らかくなりかける度に監視カメラで確認してい

る係の人間がスイッチを入れて勃起を促すのだ。

(ああ……ちんちん痛いよお……)

もう三十分も勃起しっぱなしだ。

仕事だから仕方のないことだけれど、普段だったら今頃はすでに一回目の射精を終えて休憩に入っている。

(早くイきたい……)

無理矢理勃起させられて可哀想なちんちんを、早くオナホールでゴシゴシしてほしい。

操作ボタンの前に、初めて見る客が立った。望月が案内していた男だ。こちらを見て、柔らかな笑みを浮かべている。

「おちんちんで遊ばせてね」

「あ……」

エッチな言葉。たくさん遊んで、と心の中で返事をする。

客がボタンに手を置いた。真剣な表情。頭の上を、オナホールがゆつくりとペニスに向かって動いていく。

(あ……あ……)

下りてきたそれは手に当たった。三センチ手前寄りだった。でも新規客のようだし仕方ない。

もしさっきの男が言ったように、ペニスを動かすことができればこっちだって楽だけれど——それをすればペナルティを取られる。一か月も仕事前に搾精されるなんて耐えられるわけがない。

オナホールは二回目も手に当たった。今度は奥に行き過ぎている。それから三回、四回と男は何度も何度もクレーンを動かした。

「あっ……」

オナホールの先端が亀頭に触れた。けれど中心から逸れていて、柔らかいオナホールはくるんと横に曲がってしまった。中途半端に亀頭をいじられてもどかしい。

「惜しかったですね」

「でもコツは挿んだよ」

男は望月に見向きもせずと答えると、もう一度ボタンを押し込んだ。

「あ、あ……」

クレーンがピタリと止まる。

ここで働くようになって半年。もう、オナホールが下りてくる前に当たりがわかるようになっていた。数秒後に与えられる快感への期待に胸が震える。

（そう、そこ……）

ゆっくり亀頭の中心を狙って下りてくるオナホール。

「あ、は、あっ」

期待に熱い吐息が漏れてしまう。やっと射精させてもらえる。やっと射精する瞬間を見てももらえる。

我ながら変態だと思う。でも機械に、人に見ら

れながら無理矢理射精をさせられる、というシチュエーション以上に興奮するものはないと思っ
ていた。

「ああああああ！」

ぬるぬるのオナホールが亀頭を包んだ。クレール部分が光りだし、ぐちゅぐちゅという音を立てながら激しい上下運動を始める。プライズ役の体のサイズは細部まで登録されているので、オナホールが抜けてしまうことは決してない。

「おめでとうございます。お上手ですね」

「ありがとうございます。これは射精するまで動くのかな」

「左様でございます。透明のオナホールの中が白濁にまみれる瞬間をとくどご覧くださいませ」

客の視線がペニスに集中している。見られている。いやらしくて恥ずかしくて気持ちいいところを客の男に——。

「ああああああああ！」

びゆるびゆるっと精液が噴出した。亀頭に粘り気のある液体がまとわりつく。

「あああ！」

(なんでっ！)

もう出たのに機械の動きが止まらない。いったいどうして。壊れたのだろうか。

「止まらないぞ？」

「おかしいですね……」

なんでもいいから止めてほしい。もういった。

もう出てる。もう出ない。くすぐったい。なのに気持がいい。

ダメ——。

4・消火ゲーム

「先ほどは申し訳ございませんでした。プレイ回数が二十回以上残っていると止まらなくなるという仕様になっていたようでございまして……見苦しいところをお見せしてしまいました」

「とんでもない。かわいい男の子の機械姦による失禁なんて、普通なかなか見られるものじゃないからね。最高だったよ」

「恐れ入ります。——お客様は男の子の放尿シーンもお好きでございませうか」

「うん、好きだよ。たまに行く店では後ろからペニスを持ってやって放尿させている」

「ではおすすめのゲームにご案内いたします」

望月に連れられてやってきたのは、消火ゲームと書かれたドアの前だった。

「こちらはいわゆる建物火災を想定した消火ゲームでございます。中は迷路のようになっておりまして、消火器役の男の子とともに進み、すべての火を消してから出口に向かっていただきます」

「ほお……その水はもちろん」

「はい。男の子のペニスから出て参ります」

「最高だ」

クレインゲームもよかったが、こちらの方が好みに合っている。

自制していないと足が勝手に中に向かってしまいうさだ。はやる気持ちを抑えて説明を聞く。

「火はもちろん偽物ですのでご安心ください。ただし消火には一定の水量が必要でございます。途中で水漏れがあったり、一か所で必要以上に水を使ってしまった場合など、足りなくなることがございますのでご注意ください」

「その場合はゲームオーバーということになるのかな」

望月は笑みを深めながら首を振った。

「途中に消火栓がございます。足りない場合はそこから出る管を男の子のペニスに入れていただき、中に水を補充してくださいませ」

そんなことをしたら放水させ放題じゃないか。

これまで幾度となく男の子の放尿を見てきたし、させてきたが、どれほど溜まってもほんの数秒、長くても数十秒で排尿は終わってしまった。それを無限にできるとは。この中に住んでしまいたいくらいの気持ちになる。

「最高だな。制限時間はあるのか」

「三十分となっております。お待ちのお客様が多い場合はご協力をお願いすることもございますが、

本日は空いておりますので」

「三十分か……」

迷路と言っていたし、放水にかけられる時間はそれほど長くはないだろう。しかしスムーズに見えることさえできれば、余裕をもって楽しむことができそうだ。

バンドをかざし、料金を払う。

「男の子はこちらの中からお選びいただけます。

好みの子をご指名ください」

差し出されたファイルにはバストアップと全身の写真が載っていた。どちらも裸だ。ページを捲るが、どの子もかわい。体形や外見では選びがたかったので、膀胱の容量が一番多い子を選んだ。

受付の男に連れられてきた全裸のその子は、まるで幼児のように腹をぼっこりと膨らませていた。

「初めまして。よろしく願います」

尿を我慢するようにもじもじと動く足がかわいらしい。ペニスも小さくて、持てるだろうかと考えるだけで興奮が高まる。

「よろしくね」

「中は暗くなっておりますので、転ばないようピッタリとくっついて慎重にお進みください」

「ありがとうございます」

「私は出口でお待ちしております」

望月に別れを告げ、男の子の肩を抱いてドアを開けた。

* * *

漏れそうだ。膀胱は生理食塩水でパンパンになつてしまつている。今日は少し、入れすぎたかもしれない。

「大丈夫？」

初めて会つたこの客は、とても優しい話し方をした。

「は、はい……」

背中に添えられた大きな手が、優しく先に促す。

「転ばないように気をつけて」

「ありがとうございます」

通路は頭に入っている。その都度火災発生場所のパターンは変わっているけれど、どちらにしても先導することは許されていないので客が選ぶルートをついていかなければならない。甘えるように腰に抱きつき、ゆっくりと歩を進める。

「あ——あれかな」

暗い中、奥にわずかに見える赤い光。本物の火災が発生した時にわからなくならないよう煙に焦げ臭い匂いはつけられていない。しかしそのかわり、ほのかに甘いやらしい匂いが漂っている。

「これだね」

二メートル手前で客が歩みを止めた。腰にすがりつくように抱きついたまま顔を見上げる。

「さあ、消火しようか」

頷くと肩を抱き直され、前に立たされた。当然恐怖なんて感じない。あるのは胸の高鳴りだけだ。客の手が膨らんだ腹を撫でてからペニスを握った。

いつもと同じ行為なのに、なんだか今日はとてもドキドキしてしまっている。

客の人差し指が、先端の皮の窄まりに優しく触れた。

「真性くんかな」

「あっ……」

「おちんちん、むきむきしても大丈夫？」

「はい……このままだと狙ったところに放水できないので、むきむきしてください」

「じゃあ仮性包茎なんだね」

これまでの客は何も言わずに勝手に皮をむいたので、確認されたのも、こんなにいやらしいことを言葉にしたのも初めてだった。

「あ……はい、仮性……です」

「もし痛かったら言っつてね」

「はい」

前に回された腕にすがりつき、意識をペニスに向けて優しい手の感触を楽しむ。

「膨らんだお腹も、皮がたくさん余った小さなおちんちんも子どもみたいでかわいいね」

「あっ……」

スムーズな放水が必要なので、消火器に勃起は許されていない。そのために仕事の前に三回の射精が義務付けられている。最後にイってからは、まだ一時間も経っていない。けれどまた起ってしまいそうだった。

正面の火を表す明かりが強くなった。それに客も気付き、視線を向ける。

「ああ、火が大きくなってしまった。さあ消火させてね」

「あっ！」

客の指先が皮のむけ具合を確認した。尿道口を乾いた指で撫でられ、痛みとも快感ともつかない感覚があった直後、ペニスを握られ火に向けられた。

「さあ、たっぷり出して」

5. トイレ

「お疲れ様でした。いかがでしたか」

「言葉にならないほど最高だった。もう一回入りたいところだが、そろそろ暴発してしまいそうだ」

「ご満足いただけただけで何よりでございます。料金はかかりますが遊ぶ回数に制限はございませんので、何度でもお楽しみください。ひとまずお手洗いにご案内いたします」

トイレか。しかしこれほどまでにいやらしい店のことだ。きっと普通のトイレではないのだろう。望月に続いてフロアの隅に行くと、百貨店などによくあるトイレの出入口があった。思い違いかと少し残念に思ったが、中に入って驚いた。

通常小便器が並んでいるところにあっただのは、四つん這いの男の下半身だったのだ。一、二、三……全部で六人分。

「これは……」

「手前が勃起しているお客様向け、奥は排泄のみご希望のお客様向けの小便器です。右手側に並ぶドアは通常の洋式トイレでございます」

「手前と奥は何が違うんだ？」

便意はない。もしあつたとしても、誰もが我慢してでも小便器を利用することだろう。

「簡単に違いを申し上げますと、手前はキュッとしまったアナル便器、奥は柔らかいアナル便器となっております。手前は勃起をそのまま挿入していただき、射精の後に排尿いただけます。奥は肛門鏡を使って広げたアナルに柔らかいペニスを挿入していただき、ぬくもりの中で排尿をお楽しみいただくものとなっております」

「ほう……」

今の相田のペニスは半勃起の状態だ。さっきまでは中学生にも劣らぬほど硬く反り返っていたが、歩いてきたことで落ち着き始めてしまっていた。

「どちらでも好きな方をご利用ください。もしこちらで射精されるのがもったいないのであれば、奥の冷蔵庫の中にほどよい冷たさのタオルがございます。そちらで一度勃起を静めていただいてもかまいません」

「そうか」

「では、私は外におりますので。どうぞごゆっくりとお楽しみくださいませ」

一人になると、悩んでしまった。

射精はしたい——が、今したら残りのゲームを愉しめなくなりそうだ。まだまだ若者には負けないと自負しているが、相田ももう四十歳。一度射精してしまえば、一時間は気分が落ち着いたままになってしまおうだろう。

かといって、自分で勃起を静めるというのもなんだかなあという気がした。しかし出すか、静めるかの二択しかない。しばし悩んだが、タオルを使うことにした。

冷蔵庫から取り出したタオルをフラスナーの間からペニスにあてる。

「っ……っ」

望月の言っていたとおり、冷たすぎるわけではなかった。しかし充血したペニスには布越しでもつらい温度。ペニスは一瞬で萎えた。

タオルをかごに入れ、「排尿オンリー」と書かれたプレートの下がった尻を順に見ていく。

(どの子もかわいいな……)

顔は見えない。しかしぷりっとした尻はかわいらしいし、その中心に見えるアナルも赤やピンクで愛らしい。

決めるのは難しいなと思いつながら奥まで歩いていくと、最奥にあつた尻のアナルに目が留まった。

(唯一だな……)

柿渋色。本来はこの色の方が大多数だろう。ピンク色のアナルなんてそう多くはないはずだ。しかしここでは異様に見える——だから一番奥に配置されているのか。

そつと尻に触れてみると、驚いたのかビクンと足が跳ねた。

(慣れてないのか……?)

あまり選ばれないのかもしれない。そう思ったら、どうしてもこのアナルにペニスを入れてみたくなった。

尻の上には、「ご使用方法」と書かれた紙が貼られていた。尻の横には棚が設置され、必要なものが揃えられている。ローションに肛門鏡、それにタオル。そこに支払いボタンもあつたので、バンドを近づけ料金を払う。

説明を精読してからローションをミニサイズの肛門鏡に塗り付け、ツンツンと指でアナルを突いてからそれをそつと挿入した。

「あ……」

小さな声が聞こえたような気がした。壁越しでも声を通るのかもしれない。

「今から使わせてもらおうよ」

言いながらも一度、今度はアナルのふちを撫でてみる。すると返事をするようにアナルにひくひくと力が入った。

「かわいいアナルだね」

あまり声を張る気にはなれなかったので、尻を撫でて感触でも伝える。それから肛門鏡をゆつくりと開く。とろ、とした赤い直腸が見え、ペニスに血が集まり始めた。

(すごいな……)

なんていやらしいのだろう。これまでアナルセックスは何度も経験してきたが、別格だった。赤いひだに触れてみたいし、舐めて味わってみたいとも思う。

(もったいない……)

なんでこんな子が便器を……。しかしこの子がペニスや乳首をいじらせるコーナーにいたら宝の持ち腐れだ。ここの担当でいることが正しいのかもしれない。

「すごくエッチだね。きれいだよ」

「あ……あ……」

やはり聞こえた。きつとこの声は柿渋色アナルの持ち主のものだろう。

「もし痛かったら足を動かすんだよ」

返事だろうか。開いてしまったせいでアナルを動かせないのか、きゅっと締め付けが強くなる。

「いいこだね」

説明にあるとおり、開いたアナルにペニスを挿入し、それから留め具を外して肛門鏡だけを抜く。

「ああ……絶品だ」

アナルの柔らかな締め付け。搾り取る意思はなく、まるで包み込むような柔らかさ。

「まずいな、勃起してしまいそうだよ」

居心地がいい、という言葉が当てはまるだろうか。ずっとこうしていたい。包まれていたい。この感触の下着があったら幸せだろうに、と思うほど感触のいいアナル。

（出したくないな……）

排尿しなければ終わらないし、早くしないと勃起してしまうだろう。この子に精液を出すことはできないので、そうしたらもう一度冷タオルを使うか、射精のためだけに別の便器に入れなくてはならなくなる。

（それが嫌なわけではないが……）

もう、この子を気に入ってしまった。少しでも長く楽しむために、尻を掴んでしよろしよると少しずつ尿を出していく。

「あ……あ……」

小さな声だ。壁があるので小さく聞こえているだけかもしれないが、控えめな子なんじゃないか

と妄想する。

6. もぐら叩き

「すまない、待たせた」

「とんでもございません。お楽しみいただけましたか」

「ああ。ところであの便器の子たちのペニスには触れてもよかったのかな」

「ご希望であればご自由に触っていただいで結構でございますが……」

何か言いたげだった。追加料金でもかかるのか、と尋ねると、首を振られる。

「あくまで便器ですから。触れたいとおっしゃったのは相田さまが初めてです」

「ああ、そういうことか」

言われてみれば、便器だ。普通、便器に触れたいと思う人はいない。しかし触れていいのならラツキーだった。

「射精させてもいいのかな」

「結構でございます」

なんだ、それなら触れてしまえばよかった。次はペニスを揉みながら排尿することに決める。

「ちなみに、買い取りはできるのか」

「買い取り……身請けのことでしょうか」

「ああ、そうだな。身請け……だな」

買い取りというのは適切ではなかったかもしれない。しかし身請けというのもそぐわないような気もするが。

「名目は何でもいいんだが、とにかくうちでかわいがりたい」

「便器を、でしょうか」

「ああ——いや、彼に限らず全体でだ」

便器も最高だったが、他の子もよかった。消火器の子なんかは、家にいれば毎日でも排尿シーンを見せてくれることだろう。

「可能でございます。ただ、それには双方の同意が必須になっております」

「双方の同意……」

「はい。毎日すべての従業員に身請け希望の確認をしております。その際にお客様の身請けのご希望とマッチすれば成立となります」

「そうか……」

「ですので、ご希望の従業員がおりましたらお帰りまでにご登録をお願いいたします」

「それは、例えば対面して遊ぶ子なんかには身請けをしたというのを伝えてもいいのかな」

「申し訳ございませんが、それはご遠慮いただけます
ております」

「ふむ……」

思わず顎をさすった。なかなか厳しい。しかし

直接誘うことを禁止されるのは当然のことのようにも思えた。きっと身請けを拒否されたと逆切れするような客がいるのだろう。

「万が一お客様からお誘いになられていたことがわかりますと、同意があったとしても不成立になりますのでご注意ください」

「ああ。まあ、言わないよ。ルールは守る」

「ありがとうございます」

しかし一介の客に買い取られたいと思う子は少ないだろう。それにクレイゲームで顔を合わせたような子ならまだしも、顔も見えない便器ではあちらとしても誰がいいなどは考えることすらないだろう。

でも、ダメ元でもいいから登録していこう。便器の子と、消火器の子だ。いや、乳首の子もよかつたし、オナホールの子もかわいかった。選びきれない。

「こちらからの希望だが、私を選んでくれた子全員、ということもできるのか」

「それは可能ですが……身請けには多額の料金が発生いたしますので、その点はご了承くださいませ」

「それはもちろんだ。わかっている」

「恐縮です」

金のことなら問題はない。それにおそらく学生アルバイトの子もいるだろうから、自由を奪うつ

もりもなかった。家に帰ってきてくれて、のびのびと過ごし、明るい笑顔を見せてくれて、そしてこちらが希望した時にいやらしい姿を見せてもらえればそれでいいのだ。

これでは完全にはまったおっさんだな、と内心で自嘲する。しかし気に入った子は自分の手で幸せにしたいタイプなのだ。金を払う以外の術を知らないのは恥ずかしかったが、仕方ない。

「では次のゲームにご案内いたします。相田さまは男の子のどこをどうしたい、というようなご希望はございますか」

「そうだな……」

腕を組み、考える。機械での乳首責めとオナホール、排尿介助と体内放尿は楽しんだ。

(ふむ……)

次は直接男の子に刺激を与えたい。

「ペニスでも乳首でも陰囊でもどこでもいいんだが、男の子に触れないな」

「かしこまりました。ではもぐら叩きにご案内いたします」

「男の子を叩くのか？」

そんなゲームは見ることさえ不快だった。しかし望月は余裕のある笑みを浮かべる。

「いえ、もぐら叩きを模したゲーム、と申しませうか。暴力的な行為はございませんのでご安心ください。どうぞこちらへ」

そう言うのなら大丈夫だろう。

望月の後についていくと、床一面が黒くなっているスペースがあった。壁には直径十センチ程度の穴が五つ、等間隔で横一列に並んでいる。

「こちらでございます。ルールは簡単です。この穴から出てくる勃起を手で握ってしごき、射精させるというものです」

「ほう……」

楽しそうだ。

「もぐら叩きのように出てくる時間はまちまちになっております。長く残る場合もあれば、ちよつと顔を出しただけで戻ってしまう場合もございます。射精したペニスが出てこなくなりますので、すべてのペニスが出てこなくなることを目標に頑張ってください」

差し出されたローションを受け取り、料金——一回五千円——を支払って立ち位置につく。

最初の一本はいつ出てくるのだろうか。静かに深呼吸をして、目の前の小さな穴に意識を集中させた。

* * *

『お客様がいらっしやいました』

アナウンスが流れ、ガタンという音とともに全身を拘束された。アナルに埋められたバイブが的

確に前立腺を刺激し、強制的にペニスを勃起させられる。

「ハア、あん……」

壁の裏側には、男の子が計五人並んでいる。みんなが性感を得始め、室温が上がっていく。

『全員の勃起が確認できました。これよりスタートします』

いよいよだ。今日初めての仕事。早く射精したい——けれどこれまで、このゲームで射精できたことは一度もなかった。

それは、場所のせいだった。自分はいつも、一番左端の五番の穴。

穴は一直線に並んでいるので、端から端までが遠いのだ。真ん中の担当にしてもえれば射精できるチャンスは増えるけれど、担当場所は固定されてしまっている。だからいつも、最初はともかく途中からは触れてももらえなくなることが多かった。

「ひあつ！」

止まっていたはずのバイブが突然激しく動き出した。ここでは常時、カメラで勃起の状態を確認されているのだ。余計なことを考えたせいで萎えかけたペニスが強制的に上を向かされる。

「あつ、ああつ！」

このままイかせてもらえたらいいのに——けれどアナルの刺激だけでは射精できない。ペニスを

しっかり握って、たくさんしごいてほしい——。

突然、ぐん、と背後の壁が前に動いた。固定された体は押し出されるようにして前に進み、ペニスだけを穴から出す。

「ひあああっ！」

握られた。ローションでぬるぬるの手だ。しこしこカリ首や裏筋の部分を重点的にこすられ、快感に喘ぐ。

「ああああっ！ あっ、あっ！」

すごい。これならイけるかもしれない——しかしそう思った瞬間、ぐいと背後に引っ張られるようにして裏に戻されてしまう。

「ああ……ああああ……」

絶望的な気分だった。下を向くと、ペニスがひくひくと動いている。もう少しでイけるかもしれない。なかったのに、一方的に快樂を取り上げられてしまった。

「ああああ！ ああんっ！ ああんっ！ あっ、イクっ、イー——」

三番の男の子が悲鳴のような声を上げた。気持ちよさそう——そして今度は四番の子の台が前に動く。

「ああっ！ あっ、気持ちいいっ！ おちんちん気持ちいいよお！」

今、二台が前に出ている。自分の台は次、いったいいつ動くのだろう。早く動いてほしい。思い切

りペニスを突き出し、射精したい。

「あっ！」

驚くような声に思わず右を見る。一番の子が前に出ていた。しかしさっきの二人もまだ前のまま……つまり今、客の前には三本のペニス飛び出している状態だ。人間の手は二本しかない。どうしても一人は放置されてしまうことになる。

「あああっ！ あっ、ぬるぬるすごいよお！」

「あ、やだあっ！ おちんちんしこしこしてえっ！」

「あああああ！ 出るう！ おちんちんから出ちゃううう！」

ペニスが出ているのに触れてもらえない——それはとても寂しいし、苦しいことだ。でも外に出してもらえないよりはずっといい。

「ひああん！ ちんぼっ、ちんぼ気持ちいいっ！」

「やだあっ！ 早くっ！ 早くおちんちんいじつてえ！」

「ああんっ、アツ、あんっ、アツ！」

なんだか外に出ている時間が長い。どうして自分は端っこで、しかも出されている時間が短いのだろう——理由はわかっていた。射精回数が多いからだ。特に真ん中にいる子は一日に五回くらい射精することができる。けれど自分は——。

突然体が動いた。ペニスが外に出され、冷たい空気に触れる。やっつとだ、嬉しい。でも他にも三人

ペニスを出している。きつとしごいてはもらえないだろう——穴から先端が出たと思った瞬間には、熱いものに握られていた。

7・休憩

「お疲れ様でした。いかがでしたか」

いつの間にか背後に望月が立っていた。差し出されたタオルで手のローションを拭う。

「難しいな。それに体力の衰えを痛感したよ」

「たいていのお客様はターゲットを決めて、その前でペニスが出てくるのを待っていらっしやいませ。ですから相田さまのようにすべて平等に愛撫なさって射精させられたのはすごいことだと思います」

「いや、最初はそのつもりでいたんだが、狙っていた子のペニスが出てこなくなってしまうってね」

望月が首を傾げた。

「射精したわけではありませんか」

「いや、させていないよ。させようとは思っていないが」

ゲームスペースを振り返る。黒い床にある白濁は三番の精液だ。

「少々お待ちください」

望月が設置されていた受話器を取り上げた。一

言二言話し、電話を戻す。

「申し訳ございません。五番のペニスはどうかやら裏でお漏らし射精をしてみましたようです」

「お漏らし射精？」

「はい。ペニスが惰性で射精してしまったということです。体が射精の準備をしているタイミングで裏に戻されてしまうと、途中で射精を取りやめることができずに漏らしてしまうんです」

「その絶頂に快感はあるのか？」

「ございません」

「それは悪いことをしたな」

気持ちよく射精したかっただろうに。

「このゲーム機は仕様上そういうこともございますので、お気になさらないでください」

それはそうかもしれないが、相田の気は済まなかった。

「五番の子はそのまま仕事は終わりになってしまいうのか」

「確認いたしますので、少々お待ちください」

望月が再び受話器を手に取った。その間に店内を見回してみる。

(広いな……)

ゲーム機一台一台が大きいせいもあってか、普通のゲームセンターよりもかなり広い。

近くにあった案内板を見ると、どうやら相田が遊んだのはまだ一階の三分の一程度のように

だった。しかも三階まである。二階は主に喫茶スペースで、三階は特別フロアと書かれている。

(VIP用か……)

おそらく気に入った男の子を三階に呼んで、個人的に会うことができる、という場所だろう。

「お待たせいたしました」

振り返る。「ああ」

「あと十五分ほどで使用可能だそうです。それまでどちらかに行かれますか」

「いや、それならそのソファで少し休憩することにしますよ」

体力を使うゲームだからか、もぐら叩きの横にはソファが置かれていた。

「ではお飲み物はいかがでしょうか」

「どこかに自動販売機でもあったかな」

「上のカフェから配達させることが可能です。メニューはこちらを」

差し出されたタブレット。コーヒー、紅茶、ジュース類。軽食もあるようだ。しかし十五分だけなのでコーヒーを頼むことにする。

「アイスコーヒーを。君も何か飲むといい」

「お気遣いありがとうございます。ですが、私は結構です。配達方法はどちらになさいますか」

「ん？」

もう一度メニューに視線を落とす。配達方法というところを押すと、小さなペニスとカップの

アップの写真が表示された。その下に説明が続いている。

配達方法 1

一般的なカフェと同じように、カップでお届けいたします。

配達方法 2

ご指名いただいた男の子の膀胱にお飲み物を入れてお届けし、氷入りのカップに目の前でお注ぎいたします。

配達方法 3

ご指名いただいた男の子の膀胱から、カテーテルで直接お飲みいただけます。

「選び難いな」

一つ目は論外だ。しかし残りの二つは選ぶのが難しい。

男の子の排尿を見るのは大好きだが、膀胱から直接飲むということはこれまでに経験したことがない。できるといふ店も聞いたことがなかったのだ、するならば今がチャンスだろう。

「ちなみに冷たいのは二つ目の方です。三つ目はどうしても体温が移り、ぬるくなってしまうです」

「そうか……ではとりあえず二つ目を。また後で注文してもいいんだろう」

今はほてった体を冷ましたい。それに、何度でも排尿したいと思うほど素晴らしいトイレがある。

「もちろんでございます。では配達人をお選びく

ださい」

こちらにも消火ゲームと同じようにバストアップと全身の裸が載っていた。さっきは膀胱のサイズで選んだが、今回はペニスの形で決めることにした。

今日はまだ一度も真性包茎を見ていないので、真性包茎と書かれた絞り込みのボタンを押して男の子を表示させる。残ったのは五人。どの子もかわいくてやはり選びがたい。

しかしあまり時間がないので、「おいしいコーヒーをお届けします」とメッセージが書かれている男の子を選択した。

注文を確定すると、トップ画面に切り替わった。そこに「チツプ」の文字を見つける。そういえば、さっき訊くのを忘れていた。

「ここでは男の子にチツプを払うことができるのか」

「はい、可能でございます」

「やり方を教えてほしい」

身請けができなかったとしても、チツプで気に入ったということ伝えることはできる。おそらく相田からというのとはわからないのだろうが、それでもかまわなかった。

「それぞれのゲームやトイレにはチツプ用の小さなボタンがございます。バンドの設定をチツプにご変更いただいた上で近づけていただくと、あら

はじめ設定していた金額を対象の男の子にお渡し
いただくことが可能です。消火器ゲームのように
チップボタンがない子もおりますので、タブレッ
トからはすべての従業員にお渡しただけになるよう
になっております」

「ほう」

クルタイム中と書かれたもぐら叩きの穴に近
づく。先ほどは気付かなかったが、確かによく見
れば穴の下にボタンがついていた。

「これか」

まずは試してみよう。チップ額の設定方法を教
えてもらい、二千円と表示させる。ボタンに手を
近づけようとした時、望月が相田を呼んで制止し
た。

「相田さま。この場ではチップをいただいたこと
は男の子にはわかりません。ですのでお礼のよう
なことは何も——」

「かまわないよ。それに気付かれたら身請けの時
にそれを理由にされてしまいそうだ」

金ではなく相性で選んでほしかった。手首をボ
タンに近づける。すぐに小さな電子音が鳴った。
バンドを見ると、チップ完了と表示されている。

「簡単だな」

バンドを見ると、まだたつぷり金は残っている。

こんなに簡単にできるなら、今まで遊んだ男の
子全員に配ってくればよかった。

しかしバンドの支払い履歴はタブレットとリンクしており、遊んだ男の子の確認がいつでも可能だという。そのため他の子へは後でまとめてタブレットから払うことにして、ソファに腰を下ろした。

疲れた足を休めていると、メイド服を着た男の子が目の前に立った。

「お待たせいたしました」

ふわふわした茶色い髪に、くりつとした大きな目。小柄で、身長は百六十センチくらいだろうか。女の子の格好がとてもよく似合っている。

「うん？」

「コーヒーをお届けに参りました」

「ああ、ありがとう」

まさかメイドの格好で来るとは。

短いスカートの下は白い肌。しかし膝上から靴までは黒いソックスで隠れてしまっている。もったいない。

「こちらをお持ちいただいてもよろしいでしょうか」

「うん」

ぎっしり氷の詰まったカップを受け取る。

「コーヒーが少し濃い目なので、氷が溶けたらいがちようどいい具合になります」

「そうか。コーヒーは少し温かいのかな」

君の体温で、という意味を込めて尋ねると、メ

イドの頬に赤みがさした。

「あまり温度が上がらないようにしようと思ったんですが」

「上がってしまったっているかな」

「すみません……」

「生の温度は嬉しいよ。じゃあコーヒーを出してくれる？」

「失礼します」

メイドがスカートを持ち上げた。ピンク色のリボンがついた面積の少ない下着が見える。それが膝の上辺りまで下ろされると、真性包茎の小さなペニスが見れた。

「かわいいおちんちんだね」

「あっ……ありがとうございます」

照れた顔も百点だ。毎朝このペニスでコーヒーを注いでほしい。

メイドが短小ペニスを手に持った。勃起していないそれは、ふにふにと柔らかそうだ。

今か今かとその瞬間を心待ちにしていると、メイドがおずおずと口を開いた。

「あの、すみません、もう少し近くに——」

「ん？」

「すみません、皮が邪魔してどこに飛ぶかわからなくて……」

「ああ、そうだね。じゃあ君がこちらに来てくれるかな」

「あ……でも、跳ねたコーヒーが顔にかかってしまうかもしれません」

メイドが眉尻を下げる。控えめな感じもとても好みだ。

「直接かけてくれてもかまわないよ」

ほほ笑みかけると、メイドはさらに顔を赤くした。耳まで真っ赤だ。こんなに純粹なら、コーヒーはかなり熱くなっているだろう。氷がとける様子も楽しめる。

「し、失礼します……」

男の子が相田の足の間に入った。すぐ目の前にかわいらしい陰部が来る。

8. もぐら叩き2

「よしやるぞ」

支払いを済ませ、ローションを手にとつぷりと塗り付ける。

軽い緊張を覚えながら、四番と五番の穴の間にも立ってペニスが出てくるのを待った。他の男の子も射精させてやりたかったので、そうやって二本ずつ順番に相手をするにしていたのだ。

三番の子はさつき射精させたのでいいだろう。あまり何度も射精させると可哀想でもある。

男の子の準備が整い、ゲームが始まった。

最初に出てきたのは一番だった。無意識に手を伸ばしたくなるが、その気持ちをグツとこらえて四番と五番の穴に視線を戻す。

わずかに機械の音がした。四番だった。右利きなので左手での愛撫は慣れていないが、それでも精一杯ぐちゅぐちゅとローションの水音を立ててペニスをしごく。

「ひああああん！」

かわいい声だ。もつと聞いていたいが、早く射精させてやらないと五番の子と同じようなことになってしまう。それにうまくいけばこのプレイで全員を射精させることができるかもしれない。きつと一番と二番も中途半端な愛撫や勃起が続いていて苦しいだろう。

しこしこ夢中でペニスをしごいていると、五番のペニスが飛び出してきた。可哀想なことをしてしまったペニス。様子を窺うために最初は優しく握り、硬さを確認してから手の動きを速くする。

「っ、あっ、あっ！」

こちらもいい声だ。しかしどこか苦しそうにも聞こえる。さっきのお漏らし射精というものが堪（こた）えているのだろう。

「すまなかつたね」

両腕を左右に伸ばし、二本のペニスを思い切りこする。しかし意識は五番に集中していた。もつとうまくいじってやれば苦しませなくて済んだ

のに……左手からペニスの感触がなくなった。そしてその直後、右手からも熱いものが消えてしま
う。

(短いな……)

これでは男の子はかなり苦しいだろう。それに
またお漏らし射精をしてしまうかもしれない。

(早く出てこい……)

二番のペニス、三番のペニス、そして一番のペ
ニス……形も色も、皮や亀頭の様子もまったく違
うペニスが次々に出ては入つてを繰り返す。

はやる気持ちを抑えて穴の前で手を構えたまま
待っている、ようやく五番のペニスが現れた。
出てきた瞬間にしっかりと握り、思い切り動かす。
四番も出てきたので、そちらも愛撫する。

徐々に二の腕がパンパンになってくるが、それ
でも手を止めずにいると、二つの亀頭がどちらも
一目見てわかるほどに膨らんだ。

(イけるか……?)

このままイかせてやりたい。そう思ったのに、
二本ともまた中に戻ってしまった。

(くそ！)

今頃漏らしてしまっていないだろうか。特に五
番の子は、二度も連続でそんなことになればムラ
ムラするどころか悲しい気持ちになってしまうだ
ろう。

次に出てきたのは二番のペニス。そして三番、

一番と続き、四番と五番はなかなか出てこない。焦らす時間が長すぎるのではないだろうか。今頃泣いていないといいが……。

じれったい気持ちで待っていると、ようやく四番のペニスが姿を見せた。瞬間的に握り、思い切りしごく。しかし疲れもあつて思うように動かすことができない。

せめて壁でなければ。床から上に出てくるタイプだったらもう少ししごくやすかったのに。

しかしこれも店側の策略だろう。

「あつ、あつ、あつ、気持ちいいよお……」

泣きそうな声が聞こえた。つらそうな声に、相田の胸が締め付けられる。

「あつ、あつ、イっ——」

あと少し——しかし、四番のペニスは無情にも穴の中に吸い込まれるように消えてしまった。

「くそ！」

大丈夫だろうか。出てしまっていないだろうか……：気になったが、もう一度四番のペニスが姿を現した。咄嗟に体の向きを変え、向かい合うのではなく壁に背をつけるようにして右手でしごく。

「ひあああああんっ！」

亀頭がさつきよりも膨らんでいる。イけそうだ。

「トイレに行ってくる」

「ではここでお待ちしております」

「悪いな」

あの柿渋色をしたアナルの子はまだいるだろうか——はやる気持ちを抑えきれず、早歩きでトイレに入る。

小便器用の一番奥——いた。しかしさつきよりアナルが少しふつくらしているように見えた。

「ただいま」

アナルに触れてみる。ピクンと動く、その初心(うぶ)な様子が愛らしい。

「また使わせてもらおうよ」

この子のアナルは見ているだけで勃起してしまう。冷タオルを取り出したペニスに直接当てて早急に萎えさせる。

「っ……っ」

つらい冷たさだが、この子に入れるためと思えば耐えられる。

タオルをかごに投げ入れ、支払いを済ませてからとろっとしたローションを付けた肛門鏡を柿渋色に挿入する。

「あ……っ」

さつきと同じ声。アナルの色と形でわかつてはいたが、同一人物であるという確証を得てほっとしながら中を開く。

「ああ……いやらしいね。とろとろだ。さっき私が入れた尿はどうしたのかな」

当然返事はない。この子から聞きたかったが——まあ、きつと係の人間が洗浄したのだろう。

ペニスを咥え込むためだけに存在するような淫猥なアナルにペニスを挿入し、肛門鏡を引き抜く。

「はあ……起ちそうだ」

温かく、柔らかい。まるでアナルに愛されているかのような錯覚に陥る。今は他の人間も使っているはずなので舐めたいとは思わないが、身請けをして自分だけのものになったら味わってみたい。

「触っていいと聞いたよ」

驚かせないように尻を撫で、その手を肌にそわせながらペニスに触れる。サイズと形を確認するために全体を手で辿ると、ずるむけの亀頭に触れた。

「こんな無防備に大切な先っぽをさらして……守っておかないと、悪い人にたくさんいじめられてしまうよ」

望月は便器に触れたがる人はいないと言っていた。だからむしろその悪い人というのはまさに相田なのだが、この子をいじめたいとは思わなかった。

「ほら、包んでいてあげよう。包皮のかわりだ」

10・二階 カフェ

相田がトイレから出ると、望月は案内マップの前で待っていた。

「おかえりなさいませ」

「待たせたね」

「お楽しみいただけましたか」

「ああ。どうしても身請けしたいと思うくらい気に入ってる」

「何よりでございます」

君のこともだ、という言葉はまだ胸に秘めておく。

「一度休憩をしたいんだが」

「では二階に参りましょうか」

「二階——」

視線を案内マップに向ける。温泉、マッサージ、カフェ、仮眠ルームと書かれていた。

「そろそろ小腹が空いてきた。カフェがいいな」

「かしこまりました。こちらへどうぞ」

エスカレーターで二階に上がると、テーブルとソファが置かれた広いフロアが広がっていた。そこを黒と白のフリルでできた女性用ビキニをまとった男の子たちが歩き回っている。

「いらっしやいませ」

相田に気付いた一人の男の子が走り寄ってきた。

乳輪をギリギリ隠すトップ。下半身も同じように、ペニスと陰囊が見えるか見えなにかという小さなサイズの紐パンだった。歩く振動でフリルが揺れ、その中の大切な部分が見え隠れしている。布面積は小さいが、どうやらメイド服をイメージしているようだ。

「一名様」

望月が男の子に告げる。

「かしこまりました。こちらへどうぞ」

メイドがぐるりと踵を返すと、むき出しの背中とお尻が見えた。前を隠すためのフリルを支える紐が首と腰に通っているだけだ。

「では私は一旦失礼いたします」

「いや、一緒にどうぞだ。喉も渴いただろう」

しかし望月は「お気持ただけありがたく頂戴いたします」と言って腰を折った。もしかしたら店のルールがあるのかもしれない。それなら無理強いをするわけにはいかなかった。

「わかった。ではまた後で」

望月に頷き、メイドに向き直る。すぐに歩き出したので、望月を見送ることはできなかった。

「これは制服？ よく似合ってるね」

「ありがとうございます」

案内されたのは三人掛けのゆったりとしたソファだった。相田が腰を下ろすと、案内してくれたメイドもなぜか隣に座ってしまう。

「お飲み物は何になさいますか？ お食事もご用意しております」

「アイスコーヒーをもらうよ。軽いものが食べた
いんだが、何があるかな」

「こちらをどうぞ」

渡されたメニニュー表からサンドイツチを選ぶ。

「かしこまりました」

メイドは腰ではなく手を上げた。すぐに別の男の子がやってきて、オーダーを聞いてカウンターに歩いていく。

「少々お待ちください」

隣に座ったままの男の子。つい視線が陰部に向かってしまう。

(もう少しで見えそうなんだが……)

「……エツチ」メイドがまんざらでもない顔でフリルを撫でる。

「つい、かわいくて」

「へへ……そうですか？ ありがとうございます」

素直に礼を言う子は珍しい。謙遜されるとどう伝えたらいいものかと頭を悩ませることになるが、受け入れられるとこちらの気持ちも満足する。

「ここは普通の飲食コーナーじゃないの？」

「こうして隣に座って飲み物を持ったたりお口を拭いたり……です」

「そうなんだ」

メイドがわずかでも足を動かすと、その度にフ

リルが揺れて、大事なモノが見えそうになる。

「ご主人様……そんなに僕のおちんちんが見たいんですか」

メイドがふふっと笑った。見たくないわけがないだろう。そんな気持ちを押し殺してメニュー表を取る。

「……ないな」

「何をお求めでしょうか？」

小首を傾げる仕草がよく似合う。

「隣に座った男の子のおちんちんを見る注文」

メイドはくすくすと笑った。

「そんなの注文する必要はないんです」

「じゃあどうしたらいいの？」

なんとなく想像はついていたが確かめたかったし、本人の口から聞きたかった。

「僕はメイドなので……命じてください。ご主人様」

想像どおりだった。口元が緩まないよう意識する。

「じゃあ……おちんちんを見せて」

「はい」

メイドが魅惑の三角コーナーを隠すフリルを持ち上げた。柔らかそうな小さなペニス。欲望のままに勃起したそれもかわいいが、おとなしいものもとても愛らしい。

「かわいいってよく言われるでしょ」

「それは小さいって意味ですか」

膨らんだ頬を指先で優しく突く。

「おちんちんよりこつちの方が大きくなりそうだ」

「ふふふ」

イチャイチャしている間にコーヒーとサンドイッチが届いた。手を伸ばすと、相田がグラスを持つより先にメイドに手を握られる。

「コーヒーとサンドイッチ、どちらがいいですか？」

もう性的興奮で食欲など消えていた。後でメイドに食べてもらえばいいだろう。

「コーヒーを」

「ふふ、はい。ご主人様、あーん」

口を開くと赤いストローが差し込まれた。すぐ近くから覗き込んでくるかわいい顔に意識を奪われすぎて、味を楽しむことができな

(これではまったく休憩にならないな……)

座ったことで足は楽になったが、ペニスにはギンギンに屹立している。

「おっぱいも見せてもらえるのかな」

「だから……僕はメイドですから」

恥ずかしそうにもじもじしながら言われると、触れてしまいたくなる。

「じゃあおっぱいを見せて」

「ご主人様のエッチ」

メイドがグラスをテーブルに置き、両手でブラ

のフリルを上げた。薄いピンク色の乳頭がツンと起っている。

「きれいな色だね」

「ありがとうございます」

「おっぱいとおちんちんを見ながら飲みたいな。」

膝の上には座ってもらえる？」

どこまでだったら許されるのだろうか。見せるだけでお触りは禁止というのが普通だろうか。

「失礼します」

しかしメイドは嫌がるそぶりもなく相田の膝の上に対面で座った。手が離れたのでペニスは隠れてしまったが、両方の乳首はちゃんと見えている。

「あっ」

「ん？」

「ご主人様のおちんちんが……」

いたずらっ子なメイドが恥ずかしがるふりをしてしながら腰をゆすり、ペニスをこすり付けてくる。

二．温泉

とても楽しい時間だった。

（彼もいれば、その反応も含めてもっと楽しめたのに……）

望月が誘いにくれなかったことを残念に思いながら、その姿を探す。

「相田さま。カフェはご満足いただけましたか」
振り返ると、落ち着いた表情の望月が立っていた。こんな空間にいるのに少しも興奮していない——もしかして相田のプレイ中にでも抜いているのだろうか。

「あ……ああ。楽しかったよ。もしかしてずっとここで待っていてくれたのか」

「いえ、一度事務所に戻っておりました。そろそろかと思ひまして。お待たせしなくて何よりでした」

おそらく、もっと前から待っていたのだろう。しかしそうとは言わないところに好感を持つ。

（やっぱり欲しいな……）

家のことすべてを任せたい。彼ならきつと、メイドに手を出すことなく統率してくれるだろう。

「次はいかがいたしましょう」

「そうだな……汗を流したい」

もぐら叩きで汗をかいていたし、メイドともびったりくっついていた。不快に思わせなかったか今頃不安になったが、済んだことは仕方ない。

「では温泉にご案内いたします。同じフロアです。こちらです」

どうやら本物の温泉を引いているらしい。温泉コーナーに近づくにつれ、硫黄の匂いを感じ始めた。

「君も一緒にどうかかな」

「いえ、私は——」

「そうか……」

やはりダメか。この分だと泊まりに誘っても断られてしまいそうだ。それがルールなのなら仕方がないが……できれば一晩共に過ごしたい。そして快楽を求める顔が見たい。

「……せつかくですのぞ」

「え？」

「せつかくこのような非日常の世界にいらつしやるのですから、どうぞ私のことはお気遣いなく」

つまり、禁止されているのではなく遠慮してくれていたということか。

気遣っているのではなく、自分の願望のために誘っていたのだが——しかし今それを言えば警戒されてしまうだろう。

「……ああ。ありがとう」

温泉も誘ってみようかと思ったが、さすがに髪が濡れるようなものはダメかもしれない。少しゆつくりしてくるから休憩を置いてほしいと言いおいて、支払いを済ませて中に入った。

* * *

「ご指名ありがとうございます」

裸でお客様を迎え入れるというのは何度経験しても慣れるものではない。

けれど自分の担当はお風呂。お客様が肌をさらすというのに自分だけが着衣でいるわけにはいかないし、そんなことをすれば摩擦で肌にダメージを与えてしまうかもしれない。

「少し汗臭いかもしれない」

そうやって遠慮する人ほど身だしなみに力を入れていて。でも何より、男性の汗の匂いが好き——それを自分が堪能しながら、自分の手で自分の匂いに移し替えることに興奮する。

そんな変態的な願望が顔に出ないよう気を付けながらお客様の衣類に手をかける。

「お楽しみいただけましたか」

「ああ、すごくてね。でももぐら叩きでかなり汗をかいてしまった」

「あれは皆様そうおっしゃいます。だから温泉に浸かって、その後マツサージを受けに行くと」

「最高のコースだね」

お客様の笑い方は軽やかだった。風俗業界を熟知していそうな余裕を感じる。

服をすべて脱がせ、手を引いて個室の風呂に入る。

「滑らないようお気を付けください」

「ありがとう——おお、これは素晴らしいな。まるで旅館の温泉だ」

「お気に召していただけて何よりです。お湯に浸かる前に掛け湯をいたしますので、こちらにお座

りください」

「いや、先に体を洗ってほしいな。せっかくの湯を汚してしまう」

紳士的な人だ。他のお客様は気にしないか、もしくはすぐに手を出してくるというのに。

前回接客したお客様は、服を脱ぐや否やすぐに乗りかかってきた。体を洗うためのマットに押し倒され、ペニスを洗うという名目で強引にアナルに突っ込まれ、その時の怪我が原因で今日は一週間ぶりの出勤だった。

マネージャーが「どうやら穏やかなお客様のようだから」と言って担当に当ててくれたし、会ってみて実際に優しそうだとは思ったけれど、恐怖心と警戒心はなかなか消えない。

「かしこまりました」

シャワーの温度を確認し、マットに腰掛けたお客様の足先から順に体を流していく。

「粒が細かいね。まるでミストみたいだ」

「水圧が強い方が好みでしょうか。ヘッドの交換も可能です」

「いや、包まれているみたいで気持ちいいよ」

ありがとうと笑顔を向けられ、安心するとともに、なぜかトクンと胸が鳴った。

「……今日はどちらのコーナーで遊ばれたんですか」

「いろいろね。私は初めてだったんだが、どのゲー

ムもとても素晴らしかった。一般的なゲームセンサーにはまったく行かないんだが、ここにはすっかりはまってしまったよ」

そう言って、どこか恥ずかしそうに笑う。

「そうなんですネ。すべて回られたんですか？」

「いや、まだまだ。種類は同じでも担当している男の子が違うだろう？ 今夜は泊まることにしたから、残りは明日回るつもりだ」

「お泊まりですか？ それは楽しみですネ」

シャワーを止めてマットに寝転んでもらい、失礼しますと言ってから体を跨ぐ。

いい体だな、と思った。普段から運動をしている人の体。

泡を手のひらにのせて肩から順に撫でていく。

「ああ、気持ちいいよ」

雰囲気も話し方も落ち着いているので、ある程度年齢がいつているのかと思っていたが、肌には若々しい張りがあった。

「普段からお仕事でお疲れなのではありませんか」

「そうだね……それはある。だが今日はここで精神的な疲れが取れたよ。肉体的な疲れはあるが、心も体も軽くなったような気がする」

しかしどうやらおしゃべりが好きなタイプらしい。こういうところでは本音が出るので、第二の仕事——満足度調査——を始めることにする。

「このゲームが一番楽しかった、というものはあ

りますか」

「うーん……選べないな……。どれもよかった。乳首だけで射精する男の子は初めて見たし、ガラス越しに見る失禁もよかった」

「失禁……ですか」そんなゲームあったらどうか。

「オナホールがついたクレーンゲームがあつてね、どうやら案内人も知らなかったようなんだが、二十回以上プレイ回数が残っているとオナホールがおちんちんにかぶさった後、しばらく止まらなくなるらしいんだ」

「では……」

射精をした後も強制的に扱かれ続けたというところか。想像するだけでぞつとする。

「吹き出した潮で精液が流れて、それがまた黄色い液体で流れていって……とても卑猥だった。ただ、お客さんが集まってきてしまつてね。みんなに失禁するところを見られてしまつて、彼にはかわいそうなことをしたよ」

「見られるのが悦びという男の子が集まつておりますので、今頃癪になつているかもしれません」

フオローする意図はなく、事実として言つたまゝでだった。けれど本当にその子が潮吹きや失禁を気に入ってしまったとしたら、これからは苦しい日々を送ることになるだろう。だってプレイ回数が二十回以上残る……いったいどれだけのお金を一括で支払つたのだろう。そんな使い方をす

るお客様はそういないはずだ。

「そうかなあ。そうだといいたが……おちんちんが怪我をしてしまっていないかもちよつと気になってるんだけどね」

「大丈夫だと思います。クレーンはパイプからローションが出る仕組みになっていきますし、柔らかいタイプのオナホールですから」

「そうか……それなら大丈夫かな。気が楽になったよ。ありがとう」

丁寧な人だ。

もう一度安心させるようににこりと笑いかけ、それから胸に手を這わせる。

「筋肉が少し張っていますね」

「ああ、それはたぶんもぐら叩きゲームのせいかな」

「ああ……ふふ」

さっきもそれで汗をかいたと言っていた。よほど熱中したのだろう。

「中年には厳しいゲームだったよ。でも全員をイかせてあげたくてね。何度も粘ってしまった」

「全員……ですか」

みんな最初はそう思って始めても、途中で体力や金銭的な事情から諦めてしまう。そしてみんな次からは狙いを定めてその子だけをイかせようとするのだ。

「はは。半分は年寄りの意地だよ。でも穴から飛

び出してくる無防備なペニスはどれもとてもかわ
いかった。仕事でしているだけだとわかっている
が、こちらを信用してペニスを預けてくれている
…：そんなふうに見えるね。だから顔が見えな
くても全部愛しく思えたよ」

「へえ…：…」

羨ましいな、と思った。この人にそんなふう
に思ってもらえて、そしてペニスをしごいてもら
えて。

「消火ゲームは一度しか入っていないから、明日
も回るつもりなんだ。ぽっこりした子どものよう
なお腹もかわいかったし、恥ずかしそうにおしつ
こを——じゃなかった、放水する男の子は言葉に
ならないほど愛らしかった」

「男の子の排泄が好きなんですか？」

「うん。大小どちらでもいいんだけど、恥ずかし
がりながら頑張って自分で出しているところを見
るのが好きでね」

「そうなんですね」

ドキドキした。だってそれなら自分にもするこ
とができる——させられたい。でもきつとこちら
から言わない限りこのお客様から「しろ」と言っ
てくることはないだろう…：そんな自分の思いを
誤魔化すようにお客様にうつ伏せになるように促
し、背中を撫で洗いする。

「君はこの仕事はもう長いの？」

広い背中だ。筋肉もきれいについている。

「一年くらいです」

「こうして裸で個室に二人きりで、怖い思いをしたことはない？」

立場上、あるとは言えない。でもずるい自分が顔を出した。返事をしないことで察してもらい、優しく慰めてほしいと思ったのだ。

「——ごめんね」

お客様がぐるりと上を向いた。見上げてくる眉尻は下がっている。

「嫌なことを聞いてしまったね」

「いえ、そんな——」

「乱暴なことはいしから安心してね」

失敗した。想像していた以上に誠実な人だった。慌てて話を変える。

「大丈夫です。そんなふうにされるって思ってますん——あの、おちんちは手と口……もしくは僕の中、どこで洗ってほしいですか」

「選べるの？」お客様が目を見開いた。

「はい。たまに太ももの隙間や脇、膝裏をご希望になるお客様もいらつしやいます」

「それは君の体のどこでもいいっていうこと？」

「はい」

ここに入る前に説明を聞かなかったのだろうか。

「じゃあ手でお願いしようかな」

「え……」せつかく口や中——セックスでもいい、

と言っているのに。

「実はね、まだ出したくないんだ」お客様が照れたように笑う。「今夜は泊まりだから、そちらでも楽しめるようにとっておきたい」

「そっか……そうですよね」

なぜだろう。普段ならイかせなくていいとわかればラッキーだと思うのに、今はまるで失恋したような胸の痛みを感じている。

「でももし嫌じゃなければ君にも一緒に温泉に入ってほしいし……その前に私が体を洗ってあげたいんだが」

「え……あ、はい。ありがとうございます。一緒にお湯に浸かることはもちろんさせていただきますが、体を洗っていただくなんてことは」

ここはあくまで癒しの場だ。お客様を疲れさせてはいけない。

「私はもともと愛撫を受けるより、したい派なんだ。自分が気持ち良くなるよりも自分の目の前で気持ちよくなってる姿を見る方が好きでね」

嘘や氣遣いには聞こえなかった。

「……そうなんです。じゃあお言葉に甘えて」
さっきまではなるべく早く射精してもらうために、体を高めることを意識しながら体を洗っていた。でもそれが必要ないとわかったので、あまり刺激しないように気を付けながら手早く体を清めていく。

泡を流すと、お客様はすぐに体を起こした。

「ありがとう。とても気持ち良かった」

「とんでもないです」

「じゃあ交代。横になってくれる？」

「失礼します」

マットに寝転ぶと、襲われた時の恐怖心がよみがえった。体に勝手に力が入ってしまう。

「怖かったらすぐに言ってね。それで不満に思ったり、怒ったりなんてしないから」

「はい」

「……少し緊張してるね」

「洗っていただくなんて経験がなくて」

本当は、たまにいる。でも実際には洗うというよりセックスに持ち込むための愛撫だった。アナルで洗うことが許されているのでそんなことしなくてもセックスはできるのに、それでも強引に手を出してくる人はいったい何を考えているのか——何度考えても理解できずにいる。

「そうなの？　じゃあ少し怖いかな……強引なことはいらないからね」

「はい……」

お客様の手が指に絡まった。きゅっと握られ、優しくほほ笑まれる。その表情に、心の強張りがスツととけた。それと同時にトクン、とまた胸が高鳴るのを感じる。

「……かわいいね」

お客様が横に寝転んだ。洗うんじやなかったのか。距離が一気に近くなり、また胸がトクンと鳴る。

「肌もきれいだし……何か特別なお手入れをしているの？」

「いえ……全身脱毛はしましたけど」

「ああ、産毛もないね。つるつるだ」

「あっ……」

お客様の手が触れたのは肩だった。それなのに、まるで愛撫されたような声が出てしまった。

「敏感だね。触るのには慣れていても、触られるのには慣れてないんだね」

12. 保育ルーム

「おかえりなさいませ」

「お待たせ。温泉の子に訊いたんだが、キッズコーナーがあるのかな」

「ございます。ただ時間が……」

望月がわずかに顔を曇らせた。しかし歩き出したので、そのまま後をついていく。

着替えの際に男の子から聞いたとおり、それはフロアの一角にあった。プレイマットとジャングリズムが置かれた子ども向けの場所。しかし誰一人遊んでいない。

「一名様」

望月の声を聞いた受付の男が飛んできて早々頭を下げた。

「申し訳ございません。子どもはそろそろ寝かしつけの時間になっております」

時計を見ると二十一時を回っていた。どうやらかなり長い時間温泉に浸かっていたらしい。いや、その前のプレイが長かったのか。

「そうか……そうだな、また来るよ」

仕方ない。子どもは早く寝かせるべきだ。

「あ、いえ、プレイしていただくことは可能です。ただ年齢と場所の制限がございました」

「制限？」

「五歳以上の幼児は寝かしつけのため、キッズコーナーは二十一時で終了となっておりますが、三歳までの子どもであれば夜泣きの対応もごさいますのでお楽しみいただけるかと」

「そうか。場所の制限というのは？」

「こちらのキッズコーナーは幼児と遊んでいただく場所となっておりますので、赤ん坊はおりません。この奥に保育ルームがございます。そちらでプレイしていただくことになるのですが」

「ああ、それはかまわない。赤ん坊も好きだ」

キッズコーナーはオープンエリアなので、みんなの前で子どもたちと遊べる場所ということだろう。それはそれで楽しそうだが、保育ルームで夜

泣きの世話をするというのも楽しそうだ。

「ではご案内いたします」

望月と別れ、受付の男についていく。

保育ルームの入り口は薄いピンク色で、子どもが好きな動物の絵が描かれていた。

「どういった子がお好みでしょうか」

見せられたメニュー表。十八歳から二十二歳の童顔な男の子が並んでいた。どの子も裸におしめ一枚、もしくはおしめとよだれ掛けだけの姿で写真に収まっている。その周りにはおもちゃや積み木が置かれていてかわいらしい。

「写真では選べないな……一番わがままな子がいいな。もしくははぐずっている子」

「ではつい先ほど起きたばかりの赤ん坊を」

相田が頷くと、奥の個室に案内された。十畳ほどの部屋だ。部屋の奥には小さなキッチンが付いており、部屋全体にパステルカラーのプレイマットが敷き詰められている。キッチンの反対側には布団が敷かれており、想像に反してベビーベッドは置かれていなかった。

受付の男が壁際の棚を指した。

「おしめはそちらに。哺乳瓶も隣の棚にございます。お湯はその上のポットに入っておりますが、足りなければ隣のケトルで沸かしてお使いください」

「ありがとうございます。ベビーベッドはないんだな」

「はい。添い寝、添い乳ができるように当店では布団を採用しております」

「そうか。それはいい」

「あちらのドアはお風呂とトイレになっております。タオルと簡易のお着替えもご用意しておりますので」

「ありがとうございます」

ベビーベッドはエイジプレイの醍醐味ではあるが、布団を使うというのはリアルだった。本当の育児に近いプレイをすることができる。

棚の中を確認していると、大人サイズのベビーカーにのせられた男の子が入ってきた。茶色がかった髪の毛、ぷっくり膨らんだ頬は柔らかさそうで、しかし目の周りは赤くなっている。泣いていたのだろう。

「起きちゃったんだね」

連れてきた男に視線だけで挨拶をしてベビーカーごと中に入れる。

「ミルクにしようか」

早く抱き上げたいが、初対面。いきなりそんなことをすれば怖がらせるだろう。まずは敵ではないとわかってもらうところから始めなければならぬ。

ベビーカーのベルトがはまっていることを確認し、タイヤのロックをかけてからミルクを作る。流水で冷ましていると、背後でバタバタと暴れる

音がした。

「落ちたら危ないよ」

触れても泣かれることはなかった。そのことに安堵して赤ん坊を床に下ろす。仰向けにすると、おしめが膨らんでいることに気が付いた。

「おしっこか。先にきれいにしてからミルクにしよう」

新しいおしめを取り出し手早く広げる。尻の下に敷いてから汚れたおしめを開くと、全面が黄色く濡れていた。

「たくさんちーしたね」

おしり拭きでパイパンの陰部を拭い、ふーっと息を吐きかけて乾かしてからおしめをあてる。

「んうー」

赤ん坊が足をバタバタと動かした。まだ寝返りができないのか——かわいい動きを眺めていると、どちらかという寝返りを打ちたがっているというよりも、おしめを嫌がっているように見えた。

「ん？ おしめは嫌かな」

そういう子もいる。手早くおしめを外して丸めて捨てる。

「ちーもうんちも掃除してあげるからね」

丸い尻を撫でると、今度は手も足と一緒にパタパタと動かした。ふにふにの陰囊が揺れてかわい。いつまでも眺めていたいが、喉が渴いていたらかわいそうだ。

「ミルクだよ」

哺乳瓶を見せてから静かに抱き上げる。暴れられなかったので、あぐらの上でミルクを飲ませることにした。背中を左腕で支え、右手で哺乳瓶を持つ。

「熱くないからね」

「んく」

赤ん坊は器用に口を動かし、コクコクと飲んだ。嫌がられず、最初から飲んでもらえるなんて嬉しい。

「おっぱい、上手」

「んーう……んう」

どうやらまだ眠気を引きずっていたらしい。口を動かしながらも、まぶたがゆっくりと落ちていく。

（本物の赤ん坊みたいだな）

かわいい。まぶたが完全に閉じてからそつと乳首を唇から抜く。しかし、パツと目が開いてしまった。

「あにやあ！」

「ああ、ごめんね」

愛らしい赤ん坊。でもちゃんと自我はある。

「まだおっぱい啜えていたかったね」

開いた唇に哺乳瓶の乳首を戻すと、もきゅもきゅと頬が動いた。しかしまたすぐにまぶたが閉じていき、次第に動かなくなった。

(抜いたら起きるんだろうな……)

ぐずる様子もかわいいので見ていたいが、穏やかに寝かせてもやりたい。

しばらくそのまま哺乳瓶を維持して、もう大丈夫だろうと思ったところで唇から抜いた。

赤ん坊はスヤスヤと眠っていた。演技かもしれないと思っていたが、どうやら本気で寝ているらしい。そっと布団に下ろし、裸の体に毛布を掛ける。

三階の予約があるので、ここにいられるのはあと三十分ほどしかない。寝ている間にベビーカーにのせたら驚いてしまうだろうか。

それにしても、赤ん坊は寝顔を見ているだけで癒される。

(お風呂の子もかわいかったが、こちらは本当に赤ん坊だな……)

さっきの子は乳児というより幼児だった。本当ならもうミルクは卒業していそうな年頃なのに甘えん坊で、いつまでも卒業できないような。しかしこの子はただの赤ん坊だ。眠ることと泣くこととミルクを飲むことと排泄しかできない。

(本当にここは素晴らしい場所だな)

欲望のすべてを叶えてくれる場所。あとは望みさえ宿泊に頼いてくれれば——。

赤ん坊の隣に寝転ぶと、シャーという音が聞こえた。そっと毛布をめくると、皮を被ったペニス

から黄色い液体が漏れている。
(おねしょか。かわいいな)

13. 三階 宿泊施設

「相田さま」

「あ——」

失敗した。望月にも帰っていいと言うべきだった。

「赤ん坊はいかがでしたか」

「かわいかったよ。それよりすまない。もしかして待たせてしまったか」

「いえ、私はまだ勤務時間中ですからご安心ください」

「そうか……よかった。突然の宿泊で申し訳なかった。みんな気分を害していなかったかな」

帰っていいとは伝えておいたが、直前のキャンセルだった。

「ご安心ください。そのようなことはございません」

「よかった……次に泊まる時はまた指名するからと言っておいてほしい」

「それは直接お伝えいただけませんか」望月は言いにくそうに視線を下げた。

「え？ 帰らなかったのか」

「はい。朝の九時までのご予約でしたので、あと二時間弱ございますが、いかがなさいますか」

「それならすぐに行こう」

まさか待っていてくれたとは。エスカレーターに向かつて速足で歩く。

「——相田さま」

「ん？」

「もう一名、直前にご指名になられるとのことでしたが」

「ああ……」

今このタイミングで言うのか——しかし言うしかないだろう。相田が足を止めると、望月も立ち止まって振り返った。

「君だよ。君を指名したかった」

「私——ですか」

望月はぼかんと口を開け、まばたきを繰り返した。もしかしたら感づいているかもしれないと思っていたが、どうやらそんなことはなかったらしい。

「ああ」

「……私はネコではございませんが」

何よりだ。「君がいい」

「——かしこまりました。ご指名ありがとうございます
います」

コーヒーでさえ断られたというのに。これは……期待してもいいのだろうか。

望月に続いて三階に上がる。高級ホテルのようなロビーには、質の良い調度品が配置されていた。

「センスがいいな」

「ありがとうございます。こちらです」

案内された部屋にはパーティーでも使えそうな広さがあった。ベッドの前にスーツ姿の男の子が三人並んでいる。

「お帰りなさいませ」

一人が代表して言う他二人も頭を下げた。雰囲気から察するに、左から順にリバ・リバ・ネコだろう。リバの一人は短髪で、もう一人は長髪を後ろでくくっている。

「楽にしてくれ。それより待たせてしまったてすまなかつた。いや、待っていてくれてありがとう」

「とんでもございません」

そう言ったのはネコだった。にこにこしてかわいらしい。少しシヨタっぽいだろうか。童顔で、頬がふにふにと柔らかそうだ。

「もう残り時間は少ないが、飲食も自由に注文してくれてかまわない。使いたい玩具があればそれも」

「ありがとうございます！」

元気なネコだ。こちらまで気分が明るくなる。

「相田さま、どうぞお座りになってください」

長髪のリバに促され、一番近くにあったソファに腰を下ろす。正面にキングサイズが二つ並んだ

ベッドがある。おそらくこれは観賞用のソファだろう。

「いい席だ。ありがとう」

「本日は3Pと聞いておりますが」

「ああ。仲良く三人で繋がってほしい。リバの子はどちらが真ん中になってもかまわないよ」

望月が一步引いた。きつと同席するだけだと思っているのだろう。しかしむしろ、相田の中のメインは望月だ。

「玩具を注文するが、何か欲しいものがある子はいるか」

誰も手を上げなかった。望月に目配せをしてタブレットを受け取り、貞操帯を注文する。隙間が空いていて、ペニスが膨らめば触れることができるところタイプ。ただ望月のペニスサイズがわからなかったたので、S・M・Lの三つを頼んだ。

「あの、もうしてもいいですか？」

ネコに頷く。「ああ、いいよ。待たせて悪かったね。ベッドを使ってくれ」

「よろしいんですか？」リバの一人が言った。

「ああ。もしベッドが使いにくければソファでもかまわないし……とにかく私の目に入るところでしてくれれば、好きなおところで始めてくれ」

三人は恥ずかしげな表情を浮かべながら、それでも素直にベッドに上がった。服を脱がし合う様子も楽しそうなので、元から仲がいいのかもしれない

ない。

「相田さま、私は——」

望月が相田に話しかけてきた時、ドアをノックされた。ソファから腰を浮かせると、望月が「私が行きます」と言っただけでドアに向かう。

「お待たせいたしました。どうぞ」

「ありがとうございます」

貞操帯の入った箱を受け取る。新品の箱にあるのはどれも同じデザイン。望月は黙っていたが、不思議そうな表情を浮かべていた。

「服を脱いでくれないか」

「え、相田さま……？」

書き下ろし収録の製本版もございます。

(LINE)の二次元コード読み取り機能を使うと、スクショの二次元コードでもリンク先に飛べます)



わくわくレジャーランド

——サンプル——

goneone (ゝ)ーわんわん)

2022/ 7/ 17

メール:goneonegoneone@gmail.com

pixiv : 19591291

Twitter: @goneone11